

資料 1 1 説教 常に聖餐に与る義務

以下の説教は55年前に、私のオックスフォードの生徒たちのために書かれたものです。私はほんのわずかしか加えませんでした、かなり削除しましたが、当時、私は今使用するよりも多くの言葉を使っていました、しかし、1788年発行の中においてその中のどの部分も意見を変えなかったことに感謝しています。 ジョン・ウェスレー 1788年

「私を覚えてこれを行いなさい」ルカ22章19節

神をおそれない人は、このことを行うように思っては決してよくありません。しかし、聖餐が、神をおそれる人、自分の魂を救いたいと思っている人によっておろそかにされていることは驚くべきことです。一般的に行われています。それを疎んじている一つの理由は、彼らが、「ふさわしくなくて食べたり飲んだりする」のを恐れすぎているのです。それを食べたり飲んだりしない場合、いかに大きな危険の中にいるかがわからないのです。私はこのよき思考をもつ人々に、さらに正しい道を示すためによき意味をもたらしたいと願います。

I 各キリスト者にとって主の晩餐をできるだけ頻繁に与ることが義務であること。

II いくつかの反対に答えること

1. 各キリスト者が聖餐に頻繁に与らなければならない第1の理由は、それがキリストの命令であるからです。この主の言葉は聖書テキストにも示されているものです。「私をおぼえてこれを行いなさい。」これによって、使徒たちは聖なる事柄に参加しようとする人々に対して、パンを祝福し、裂き、与えるのです。それ故にすべてのキリスト者は、キリストの体と血のしるしを受けるのです。それ故に、ここにおいて、パンとぶどう酒は、主の死を覚えるために、この世の終わりまで守られるのです。この命令は、主が私たちのために命を投げだそうとされている時に語られたことを覚えましょう。それ故に、この言葉は主の遺言なのです。
2. キリスト者が聖餐を頻繁に受けるべき第2の理由は、主を覚えてこれを行う人に与えられる恩恵が非常に大きいからです。たとえば、過去の罪が赦され、魂を現在において力づけてくださり刷新してくださるのです。この世において、私たちは試みから解放されることはありません。どのような人生の道を歩んでいようとも、どのような状況にあろうとも、病気であろうとも、元気であろうとも、トラブルにまきこまれにしても、順調でも私たちの魂の敵は、私たちを罪に導こうとしてきます。そしてしばしば、試みは、私たちを支配します。私たちが神に対して罪を犯してしまった時、主から赦しをいただくどのような道があるのではないのでしょうか。主の死を求め、主に嘆願し、神の子の苦しみによって、私たちの罪を完全にぬぐいさる他ないのです。
3. ここにある神の恵みは、罪から離れることを可能にすることによって、私たちの罪の

赦しを確信させるものです。私たちの体がパンとぶどう酒で強められるように、私たちの体は、キリストの体と血のしるしでもあります。これは私たちの魂への食料であり、これは、私たちの義務を果たすのを可能にし、私たちを完成へと導くものです。それゆえに、キリストの明快な命令を保持しているならば、もし私たちが自分の罪の赦しを信じているならば、また、神を愛し、従うために信じる力を望むならば、私たちは主の晩餐を受けることを怠ってはならないのです。主が私たちのために準備された祝宴に背を向けてはならないのです。神が摂理によって準備されるこの時を逃してはいけません。これは真実な規則であります。それ故に、神が与えてくださる機会を逃してはならないのです。神が私たちに機会を与えてくださる限り与るのです。ですから、誰でもそれを受け取らず、むしろ聖餐のテーブルから離れ去るならば、自分の義務を理解していないか、主の死の中で与えられた命令、主の罪の赦し、魂を強めること、神の栄光に与るように刷新することに注意を払っていないのです。

4. それ故に神を喜ばしたいと願う人、自分の魂を愛する人、神に従い、自分自身の心と魂のよきものと相談しようと思う者はだれでも、可能なかぎり、主の日の礼拝の通常の一部であった初代教会のキリスト者のように聖餐に与ったのです。そして数世紀にわたり、彼らはほぼ毎日聖餐に与り、常に週に4度、そして聖徒の日にも与ったのです。従って、忠実な者と共に祈る者は、祝福の聖餐に与ることを疎んじたりはしません。それに背を向ける者に対してどのような意見を持っていたとしても、私たちは昔の正典から学ぶことができます。「もし信徒で忠実な者と共に祈る者で、主の晩餐に与ることなく去ったとしたら、彼を破門しよう、教会に混乱をもたらすことになるから」という正典があるのです。
5. 主の晩餐の本質を理解する為には、福音書の箇所を注意深く読むことが必要です。コリント第1の手紙において（Iコリント11章）は聖餐の制定について書かれています。この聖餐のデザインは、内的な恵みの外的なしるしであり、キリストの体と血であるパンとぶどう酒に与ることにより、キリストの死を継続的に覚えることです。
6. このことを受け取りたいと願う者は、時間がゆるす限り、自己省察と祈禱をもってこの厳粛な儀式に与るのです。しかしこれは絶対的に必要なものではありません。そしてこのための時間がない時には、むしろ習慣的に準備することが絶対的に必要であり、いかなる説明もどのような場合であっても置き換えることはできません。これは、第1には、神のすべての戒めを守ること、第2に、主のすべての約束を受け取るという誠実な望みです。

I I 私は、主の晩餐に常に与ることへの反対意見について述べたいと思います。

1. 私は常に与りなさいという語りしました。また頻繁に与るという言葉も語りましたが、これはばかげたものであるというのです。しかし、もしそれが、常にということ以下であるとしたら、それが人間の義務であるといかにしていえるのでしょうか。も

し常に聖餐に与るよう義務化されていないとしたら、どのような議論が必要なのでしょう。たとえば、1年に一度でしょうか、7年に一度でしょうか、死ぬ前には一度でしょうか。このための議論は、常に与るか、与る必要でないというどちらかのためであります。それ故に、決定がつかず、無意味な言い方は、理解のある人は行うべきはありません。

2. 常に聖餐に与ることが私たちの義務であることを証明する為に、聖餐は（1）神の命令として（2）人への憐れみとして考慮されなければならないと考えます。
第1に、神の命令として 私達のすべての命、すべてのものの与え手、私達の仲介者、支配者である神、私達が完全に幸福であるか、みじめであるかは、その御意志次第という神は、すべての命令に従う者は永遠に幸福であり、すべての命令に従わない者は不幸であると宣言されます。さて、これらの命令は「私を覚えてこれを行いなさい」ということでした。私はそれゆえ、なぜできるのにそれをしないのか、そのような機会があったのに、なぜ神の命令に従うのかと語られます。
3. おそらく、あなたは、「神はできるだけ頻繁に聖餐に与れとは言わなかった」と言うでしょう。つまり、「できるだけ頻繁に」という言葉は、ある特定の場所には付加されていません。それではどうなるのでしょうか。私たちは神の命令に、しばしば従うことはできないのでしょうか。神のすべての約束は、すべての勤勉な者に対して、つまり主の命令を守るために、できるだけのことをする人たちに語られたのでしょうか。私達の力は、私達の義務を遂行するための力です。私達が何をすることができようとも、それをしなければなりません。尊敬をもって、これを行うべきか、他の命令によるものか、もし、意志があるならば、彼はそれに従うでしょうが、もし従わないならば、天国において場所はないのです。
4. そしてこの偉大な真理は、私達はできるだけこの命令を守るべきなのですが、正反対の意見からこれを証明しようとしてもばかげたことです。というのも、私達は、神の命令には従わなくてもよいように許可されているのでしょうか、各人ができるだけ神の命令に従うようにしむけられているということを証明することは無意味なことです。たとえば、ある人は神の明快な命令になぜ従わないのかと尋ねるべきでしょうか。なぜ、彼は両親を助けないのかと訪ねるとしましょう。彼は、「今はそれをしないけれど、別のときにするよ」と答えるかもしれません。その時がきたとして、神の命令が彼の心に入るために言うと、再び、「別のときに従うよ」と言うでしょう。それを今やるということを照明することもばかげたことです。むしろ、できるだけ頻繁にしなければならぬので今やるべきです。意志があればそれが出来るのですからと証明することも不可能です。
5. 第2に主の晩餐を人への神の憐れみだと考えましょう。神にとって憐れむことはその働きそのものであり、特に人の子にとってはそうです。彼らは、幸福になるための1つの方法があることを知っていました。つまり、ホーリネスにおいて主と同じよ

うになっていくことです。神は、私たち自身の力によっては事は出来ないのですが、主の助けによってそれを獲得することが可能になるように、ある手段を与えられたのです。それらの一つが主の晩餐であり、主の無限の憐れみによって、この目的の為に与えてくださり、この手段を通して主が私たちに準備して下さっている恵みを受け取ることができるのです。このようにしてこの地上でホーリネスと天にある永遠に続く栄光を獲得することができるのです。

私は、なぜあなたが、頻繁に恵みを求めなかったのかを問いたいです。神は今や、祝福を与えてくださるのです。なぜあなたはそれを拒絶するのですか。あなたは弱いのです。なぜそのような機会を捉えて、あなたの強さを増さないのですか。一言で言えば、これを神の命令であると考えなさい。できるだけ頻繁に聖餐に与らない者には何の知恵もないのです。

6. この2つの点における考察は、頻繁に聖餐に与ることへの共通の反対に対して完全な答えとなるでしょう。聖餐はすべての人のためのものであり、そうあるべきなのです。真実、何の反対も出来ないのです。この特別な時、聖餐は憐れみを持っていないし、それを受けようとする命令は受けていないと、仮定する人もいます。いいえ、それを認めるべきであるかどうかは、憐れみがないのです、それは十分ではありません。というのも別の理由があるからです。それはあなたに良きことをもたらすでしょうか。それともそうでないでしょうか。あなたは神の命令に従わなければならないのです。
7. しかしながら、それに従わない人々が共通に行う特別の言い訳をみていきましょう。最も一般的なものは「私はふさわしくない」というものです。「もし、ふさわしくないままで食し、飲んだりすることは、愚かさを招くことをしているのだ。だから聖餐には与らない方がよいのだ。自分で墮落を呼び覚ましたくない。」その場合のケースはこうです。「神は天国のこちら側で最も偉大なあわれみをもたらされ、それを受け取るように命令されるのです。なぜ、あなたは、主への従順によって、このあわれみを受け取らないのですか。」あなたは「私はそれを受けるにはふさわしくないのです。」と言います。それからどうなるのでしょうか。神からのどのような憐れみを受け取るにふさわしくないのですか。それがすべてのあわれみを拒否する理由なのですか。神はあなたのすべてに対して赦しをもたらされるのです。あなたはふさわしくないでしょうが、主はそれを既にご存じなのです。それにもかかわらず、主はあわれみを与えようとしてくださるのです。あなたはそれを受け取られたらいかがでしょうか。主はあなたの魂を死から解放しようと願っておられるのです。あなたは生きるにふさわしくなくても、あなたは人生そのものを拒否するのでしょうか。主はあなたに新しい力をもって魂を耐え抜くことを可能にしてくさるのです。でもふさわしくないからということでそれを受け取ることを否定するのですか。あなたがふさわしくないということで神は何をすることができるのでしょうか。もしふさわしくないということで、彼のあわれみを拒否するとすれば、神は私たちのために何ができるのでしょうか。

8. しかしこのことは、私たちには何の憐れみも意味しない（まさに、それは生きて働かれる神に対して嘘をつくようなものです。また、それは、人間が自分のよきことのために目的をもって命令を発するのはよくないと考えるようなものです）と仮定してみましょう。しかし、私は、未だに「なぜ、これを行いなさい、という神の命令に従わないのですか。なぜなのですか」と問うでしょう。あなたは、これでも「それを行うのは、私はふさわしくないのです」と答えるのでしょうか。ええ、何ですって。神に従うのにふさわしくないのですか、神があなたに行うように命じたことにふさわしくないのですか、神の命令に従うことにふさわしくないということで、あなたが意味するのは、神に従うのにふさわしくない者は、神が命じたことに対しても、従うべきでないという意味なのですか。「もし、彼が天からの使者であるとしたら、呪われよ」。もしあなたが、聖パウロによって神ご自身があなたにおっしゃったと考えるならば、主の言葉を聞きましょう。それらは以下のようなものです。「ふさわしくないままで飲み食いするものは、自分自身に対して滅びをもたらしているようなものなのです。」（坂本下線）

なぜ、これは全く別の事柄なのでしょう。飲み食いするのにふさわしくないという言葉はここにはないのです。確かに、ふさわしくないままで飲み食いする者（坂本下線）については語ってはいますが、それは全く別の事柄です。パウロは、自分自身のことを語ったのです。この章では、ふさわしくないままで飲み食いすることが、聖餐をおろかな、無秩序なものにするのであり、ある人は飢えているのに、他の者は飲んでいることがあったのです。でもそれはあなたにはどのような意味があるのですか。あなたが、ふさわしくないままで飲み食いをし、それを行うことによって危険はあるのでしょうか。しかしながら、あなたがいかに聖餐を受けるのにふさわしくなくても、このように聖餐を受けることを恐れることはないのです。それ故に、罰がどのようなものであれ、ふさわしくなくそれを行うこと、それはあなたが関心を払うべきところではありません。このテキストからはあなたが従わない何の理由もないのです。むしろ、そのような聖書のテキストはないのです。聖パウロがこの言葉を使用するような意味で「ふさわしくなく飲み食いする」という言葉を使用するとすれば、あなたは「私は聖餐に与りません。そうでないと教会は墮落するからです。」とか「恐れがあるから、不適當に飲み食いしよう」と語るでしょう。

9. もし、これをすることによって、自分を滅ぼすとしたら、あなたは、本来恐れのないところに恐れを感じているのです。ふさわしくないままで飲み食いするのを恐れてはいけません。聖パウロの意味においては、あなたは行うことは出来ないのです。むしろ、あなたが、全く飲み食いしないこと、創造者、贖い主、主の明解な命令に従わず、主のあわれみと権威を無にしたことを恐れなくてははいけません。「律法全体を守っても、一つの点でつまづくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」（ヤコブ2章10節）

10. それから私たちは「私はふさわしくないで、主の晩餐に与ることができません」という反対がいかに弱いものであるかをみることができます。あなたが最近罪に陥ったから、自分のことをふさわしくないという理由も強い反論ではありません。私たちの教会で

は、「悲しむべき犯罪を犯した」者が悔い改めもなく聖餐を受けることを禁止していることは事実です。でもそこからおこることは、聖餐に与ること自体を全くしないのではなく、私たちは聖餐に与る前に悔い改めなければならないということです。

つまり、最近罪を犯したので祭壇に背を向ける。そのことによって自分に罰をくだしている」というのは、聖書からの証明なしに語ることです。聖書はどこにおいて神の命令の一つを破ることを贖うために、別の命令を破ることを語っているでしょうか。これはどのようなアドバイスでしょうか。「新しく犯した不従順の行為においても、神は過去の罪を赦して下さいます。」

11. 他の人々は、別の意でふさわしくないと考え、不従順の言い訳をする人々もいるのです。そして彼らはそれについていけないのです。聖餐を受けるために、聖なる生活を続けることができないのです。これを簡単に言うと、「神があなたに与えようとしているあわれみを受け取ることができないのですか。」と問う時に、あなたは「私がそれを受ける時にそうでなければならない信仰告白が出来ないのです」と言うでしょう。それならば、あなたは全く聖餐に与らないということは明白です。というのも、あなたが実行できないことを約束することは、その約束を数千回するよりも法律的ではないからです。あなたが一年に一度聖餐に与るにしても、毎日与るにしても、それは同じ約束だということを知っています。それを頻繁に与るとしてもまれに与るにしても、あなたは聖餐に与ることを約束しているのです。それ故に、一週間に一度だけ行いう信仰告白に到達しないならば、一年に一度だけ信仰告白することに近づくことも無理です。でも本当に出来ないのでしょうか。それならば、あなたが生まれなかった方がよかったのかもしれない。というのも主の晩餐のテーブルであなたは、罪を告白し、聖餐を守るべきなのです。そうでないとあなたは救われないのです。あなたはこのこと以外には告白しないのです。あなたは勤勉に主の命令を守るのです。この宣言を守ることはできないのですか。そうであるならば命にあずかることも出来ないのです。

12. それ故に、あなたが常に聖餐に与る者として要求されているものに従って生活することができないと語る前に、あなたの語っていることを考えなさい。そうです。誰でも救われるべき魂を持っている人にとっては、これこそ聖餐に与る者に要求されているものなのです。それ故に、つまり、あなたがこれに従って生活できないというのは、良くも悪くもキリスト教を非難していることとなります。それは、実際には、神の命令に従うことを厳粛に誓った自分の洗礼を非難しているのです。あなたはその告白から離れてしまおうとしています。あなたは意識的に主の命令の一つを破っているのです。それ故に、それらを守る人々にだけなされていた約束を受け取ることは出来ないのです。

13. この常に聖餐に与ることに対する欺瞞について語られたことは、他の言葉で同様のことを語る人々にも適用できます。「私たちは、それをしようとは思いません、なぜならば私たちが実行できると約束できないような完全な従順を要求するからです」いいえ、あなたが自分の洗礼で約束した完全な従順を多かれ少なかれ要求することはないのです。あ

あなたは、神の命令を主の助けによって守ろうとします。あなたは聖餐に与る時には、何も約束しなくてもよいのです。

14. 常に聖餐に与ることに対して行われる2つめの反対は、私たちはとても忙しく、十分な準備を行うことが出来ないから聖餐にあずかれないということです。私は以下のように答えます。「絶対的に必要なすべての準備は、これらの言葉の中に含まれている」と答えます。「私たちの救い主であるキリストに対する信仰を持っているならば、あなたが犯した過去の罪を悔い改めなさい。」（そして、この言葉は、ここでは最も貴い意味でとられていないことを観察しなさい）「あなたの姿勢を修正し、すべての人に慈善を行いなさい。そうすればこの聖なる神秘の受け取り手になります。」ですから準備ができている者は恐れなく近より、礼典に与りなさい。今や、どのような事柄が、あなたが聖餐にそなえるのを、つまり、過去の罪を悔い改め、キリストが罪人を救うために死んでくださったことを信じることを、自分の人生を修正すること、すべての人に慈善を行うことを妨げているのですか。どのような事柄も、救いの状態にあることを妨げるのではない限り、聖餐に与ることを妨害できないのです。もし、あなたがキリストに従いたいと願うならば、主の晩餐のテーブルに近づくのです。もしあなたがこのことをしないならば、あなたは悪魔の食卓と仲間たちにあっているということになるのです。

15. ですからどのような仕事も、必要な準備をすることを、それが人を天国に運ぶことを妨げ、救いの状態から取り去るものでない限り、妨げてはならないのです。真に、注意深い人は誰でも、時間のある時には、主の晩餐を受ける前に、自分の以前の罪を悔い改めようが、悔い改めなくても、神の約束を信じようが、信じまいが、神の御意志の方向へ進もうが進まいが、すべての人に慈善を為そうが、為すまいが、神の前に自己点検を行います。これにおいて、また私的な祈りにおいて、彼は、できるだけ自己点検をして過ごすのです。でも時間がないあなたにとってこれは何を意味するのでしょうか。神に従わないといことに対してどのような言い訳ができるでしょう。主はあなたに聖餐の席に来るように命じられます。そして時間があるならば備えよと言われるのです。もし、あなたにそのような時間がなくても、とにかく来なさい。それを破ることによって、守ったふりをしてはいけません。主の感情を害する恐れから主に反抗しないようにしなさい。あなたが何をしようと、またやらないままにしていたとしても、神が命じることだけを行うように心がけなさい。あなた自身を調べなさい。特に主の晩餐の前には私的な祈禱を使用するのはよいことです。しかし見なさい。従うことは、自己点検に優り、聴くことが天使のように祈ることよりも大切です。

16. 常に聖餐に与ることへの第3の反対は、礼典に対する尊敬を減じてしまうということです。そうだと仮定しましょう。それから何が起こるのでしょうか。あなたは、定期的に受けないというように結論するのですか？そのようなことはおこり得ないと思います。神があなたに「これを行いなさい」と命じておられます。しかし、「もし聖餐にしばしば与るとすれば、私が今もっている尊敬を減じてしまうでしょう」と言うのですか。そうだと

仮定しましょう。神はあなたに、主の命令に従うことは、主の命令に対する尊敬を減じるということを言われましたか。その結果、あなたは従わなくなるのですか。もし、そのような主が言われているならば、あなたは無罪です。もし言われていないならば、あなたは語ったことは、目的にかないません。この律法は明確です。律法の与え手である方が例外を示すのでしょうか。そうでなければ、あなたは主の前に罪責を持っているのです。

17. 聖餐への尊敬は2種類あります。それらは、まずそのことに慣れてない人が経験する物事の新鮮さからくるもの、次に神を愛し、神を恐れる純粋さに負っています。さて、この前者は適切には宗教的な経験というより、純粋に自然のものです。そして、主の晩餐のこの種の敬意、定期的に聖餐に与ることは弱められるに違いありません。しかしそれは、真実の宗教的な敬意を弱めたりはしないのです。むしろ、それは、宗教的な敬意を確証し、増すのです。

18. 第4の反対は、「私は、長らく定期的に聖餐に与ってきました。しかし、期待するような恩恵に与っていないのです」というものです。これは特に、善意の人に多いのです。だからこそ、特別に考慮されなければなりません。そしてこのことを考えみましょう。第1に、神が私たちに命じるものは何でも、主が命じられるから私たちは行うのです。そこに私たちが恩恵を感じるかどうかは別です。しかし疑いなく、遅かれ早かれ、私たちは、気づかないでいても恩恵に与るのです。私たちは気づかずに強められており、神への奉仕により適うものとなり、より定期的に行うのです。少なくとも、私たちは墮落することから守られ、罪や試みから解放されます。これだけでも、できるだけ多く食物に与ることが必要です。今は残念ながら、何人かがそうであったように、幸運な効果を感じることはないかもしれません。しかし、神が最善と考えられる時に、私たちもその効果を感じられるのです。

19. しかし、その人がしばしば礼典に与っているが、まだ恩恵を受けていないと仮定しましょう。それは彼自身に誤りがあるからでしょうか。彼が適切に準備していないか、すべての命令に従い、神の法則を受け取ろうとしていないのか、それとも、神を信じてそれを正しく受け取っていないのか。あなたが適切に備えているかどうかを見てごらん下さい、あなたが主のテーブルに集えば集うほど、より偉大な恩恵をそこで見出すでしょう。

20. 常に聖餐に与ることに対する第5番目の反対は、「教会は1年に3度だけ聖餐式を楽しむ」というものです。教会の言葉は、「記しなさい、各教区は1年に少なくとも3度は聖餐を行うべきである」というものです。これに対しては、私は以下のように答えます。第1に、もし教会がそれを全く言及しないこともあるのです。神がそれを申しつけられたということでは十分ではないのでしょうか。私たちは神のためにのみ教会に従うのです。それならば神ご自身に従わないでしょうか。そうであれば、あなたは教会が命令するから1年に3度聖餐に与るのですが、神が命じるのですから、聖餐に与るべきです。一つのことを行うことは、他のことを行わないという言い訳にはならないのです。あなた自身の行為があなたの過ちと罪を証明するのです。そして言い訳なしにあなたをそこにとどまらせ

るのです。しかし、第2に、これらの言葉からは、教会が1年に3度しか聖餐に与らないものを容赦することはできないのです。それらの明快な意味は、少なくとも3度しか与らない者は、教会から破門されるべきであるとうものです。しかし彼らはそれほど頻繁に聖餐に与らない者に対して、その人を許すことはないのです。これは私たちの教会の判断では決してありません。むしろ、反対に、日曜日や休日に聖礼典が正しく執行されることを、共通の祈禱が読まれるところでは、どこでも守るのです。教会は、聖なる秩序の中にあるものに特別の方向性を与えるのです。「すべてのカテドラル、大学教会、大学において、多くの祭司や助祭がいるところではどこでも、祭司と共に少なくとも各日曜日に聖餐に与るのです。」

21. 今まで第1に、もし私たちが主の晩餐を神の命令であるとみるならば、誰も、キリスト者としての敬虔を装うことはできないのです。ですからなぜ人は、できるだけ頻繁に聖餐を受けないのでしょうか。第2に、もしそれがどのように設立されたかを、私たちへの憐れみとしてみるならば、誰も、頻繁に聖餐に与らない者は、キリスト教の分別に対してみせかけのものであるということ。第3にどのような反対も通常なされないというのは、あらゆる機会に、この命令に従い、憐れみを受け取らない者は、どのような言い訳もできないということです。

22. 特に以下のことが示されてきました。第1に、ふさわしくないことは言い訳にはならないということです。ある意味においては、私たちすべてがふさわしくないのです。しかし、誰も聖パウロの意味でふさわしくないことを恐れる必要はないのです。第2に準備する時間がないというのも言い訳にはなりません。というのも絶対的に必要な備えは、私たちの救いそれ自体を妨げない限りは、どのような事柄も、地上の何ものも妨げることはないものです。第3に、私たちの尊敬を取り除いてしまうというのも言い訳にはなりません。「これを行いなさい」という命令の与え手は、どこにも「あなたの尊敬をそがない限り」とは語られていないのです。第4に、それによって恩恵を与えられないということも言い訳にはなりません。というのもそれは私たちの過ちであり、自分自身の力で必要な備えを疎かにしたからに他なりません。最後に、私たち自身の教会は、常に聖餐に与ることを好んでいます。ですから、装いながら、それを怠っている人は、これらの事柄を心に置き、神の恵みによって、よりよい精神をもち、自分自身の恵みを見失わないようにしないといけません。